
…手ちがい。

りばーさいど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

…手ちがい。

【Nコード】

N9112N

【作者名】

りばーさいど

【あらすじ】

アタシ、木菟風。通称ナギ。何かよく解んないけど、トラブルでイケメンに憑依して、色々あって勇者。どうしようもない、RP G風ファンタジー。夢とロマンは母ちゃんの腹の中に置いてきた。大きな事言っというてちっちゃい小説です。

アタシ（前書き）

突発連載小説。

どうなるのかは僕にも解りません。

気分的には、ギャグや恋愛、さくさく進める、改行しないで書く
…などなど、苦手の練習な感じで。

全てにおいて、気分で更新。

アタシ

「ねえ、お前エ。最近マジウザいんだけど」

…アタシだってねえ、うざいと思ってますよ。

うざいうざいって…言ってるアンタらがうざい。

「友達いなくて寂しいわけ？ 何で頑張ってガッコー来ちゃってんの？」

言っとくけど抵抗出来ないんじゃないかって抵抗してないだけだから。

ほら、冴え渡る右拳が血を吸いたって飢えてるよ。

…あ、嘘嘘。そんな魔剣みたいな性質無いですけど。

「おい、コイツやっちゃえよ」

—その辺の男集めてリンチ？
はっ

…アタシに勝つんならボクサー部でも連れて来いよ。

ばきっ！

「きゃははははは！」

：違うし。我慢してるだけだし。
女喜ぶなし。

ドカッ

：手エ出したら退学処分だし。

「ーな、コイツケンカ強いとか言ってなかった？」

「所詮ホラだろ！ 元暴走族総長だっていう兄貴だってスーパー店長だぜ？」

：そこは別に否定しないけど。
あゝあ、イライラする。

「犯しちゃわねえ？」

「えー…。コイツ貧乳だぜー？」

ー貧乳馬鹿にすんな！！

貧乳だって頑張って生きてるんだ！
これだけ巨乳共がはびこってる世界で！！

「いいじゃん。一応性別は女だしさ」

アタシはまあ…あんな感じでちよつと学校で敵が多いだけの普通の女子高生。

復讐というセピア色の夢見る、ちよつと乳のない普通の女子高生。
…ちなみに名前。木菟^{ミズウナギ}。木菟^{ミズウナギ}ってのはフクロウに似た鳥。変な名字だよな。

退学処分は免れた。運が良いんか悪いんか、アタシの誇張表現にまみれた『いじめられ』主張は通つたらしく、あんなだけやったにも関わらず事態の收拾といじめた生徒の保護者への納得のために、アタシは停学処分に留まれたみたい。

で、真っ昼間に下校中。

取り敢えず暇なんで、兄貴ん所に行こうと思う。

ヤツらの話は本当だ。元暴走族総長の兄貴…どつかで聞いた設定の兄貴は、たった今近くのスーパーで勤務中。

…いやいや、真面目だよ？

暴力で解決して昇格とか、断じてやってないからね。
意外と似合うんだよ、あのエプロン。

「にーちゃん」

クーラーの効いた店内。汗ばんだ身体だから一瞬ヒヤツとするが、んなモンは一過性で、既に冷氣には慣れた。

兄貴はどうやら呼び出されているらしく、レジのエラーの修復をしてる。

ってのも、誰かに訊いたとかじゃなくて。…ソコにいるから。兄貴。

「…あ？ あれ風？」

「それで御座いますよークソ兄貴」

エラーにはお手上げと、元々そのレジの担当だったらしいお姉さんに押し付けた。

お姉さんはグズグズ渋るのだが、そこは兄貴がちよつと笑えばお姉さんはOKを出す。アイツはまともにしてればまあまあ格好いいのだ。

「…どったの風ちゃん。学校は？」

「ん、停学」

「ああ停学か。良かった。停学くらいで済んで。…どんくらい？」

「…たしか、…一週間かそこら」

「了解。…ホントに軽くすんだな。今度は風が何したか知らないけど」

「取り敢えずレイプ犯ぶん殴って、腹立ったんでムービー撮りやがったケータイをへし折って、嫌がらせに全員の靴とケータイをグラウンドに埋めて、上からホースで盛大に水掛けてきた」

「…えげつねえ」

そうか？ちなみに強姦は未遂だけど。

そしてついでに財布から500円ずつ抜いたことは一人胸に留めておく。500円っていう微妙さがポイント。

はん。そう簡単にアタシが屈従するかっての。

「それで、勝利の報告を俺に？」

「そう。そして兄貴ならどうするかと思って」

「……そうだな、取り敢えず俺の姿見たらちびるぐらい虐めて、精神に俺〓苦痛を擦り込んどく。二度と変な気を起こさないように」

「シンプルなだけに怖いっす」

さっすが報復のエキスパート。

いやまあ…つまりアタシら兄妹はこういう奴らなんだけど。

しかし本題は別の所に有る。

「それでさあ、今日家の鍵忘れたから貸してくんない？」

「ハアあ？…鍵ってロッカーだけど」

「そんなん取ってくればいいんじゃない？。違うの？」

「……ああ…ハイハイ…仰せの通りに…」

鍵が必要だっただけで、正直兄貴に報告とかいらなかったけど。アタシって結構良い子だから夜遊びとかしないし。

…あれ、あなたのそれって異論？

ちょうどピーク時を過ぎたのか、スーパーに人影はなくなってきた。
ていた。

暇になった（本当はエラー調整中）レジのお姉さんが、グズなレジの機械を放り出してアタシに話しかけてきた。

：おいおい、サボりだぞ。兄貴に報告すつぞ。

「ねえねえ、：風ちゃん：だっけ？ 店長の妹さんでしょ？」

「：ああ：まあ、ーはい一応」

「店長って彼女居るのかな？」

：またソレか。

「ー居ますよ。恋狐れんこっていう」

「えゝゝ！？ ……まあ：普通に考えてそうか…」

ハムスターだけだな。

「望み薄？」

「そうですね。もう5年目っすから」

「ごねんかあゝ…」

まあ：嘘ではあるまいて。：それにコレは元々兄貴が言い出した
言い訳だ。

ハムスターの恋狐はウチのペットだし、家の兄貴に動物とにやんに
ゃんしたい趣味があるわけでもない。

「ー店長格好いいしなー…。優しいし面倒見いいし…」

夢は見ない方が良いぞ。風呂から全裸で歩いてくるような奴だ。
あんなんが居るからアタシは恋愛なんかに興味がない訳だし。い
や二次が好きとかじゃなくてだよ。

「…風、パース！」

「おうよ！…どっせい！」

店裏から出てきた兄貴が、鍵を投げた。無事キャッチしたのにあ
らぬ文句を付けられる。

「どっせいって…女の子ならもっと可愛い声出しなさい。『キャッ
とか』

「ない。きもい」

「…あの、店長。彼女とは上手くいってますか？行ってないならそ
の…友達からでも…」

おっと、いっくかお姉さん。

「…ん？ あゝ、ごめんね。結構順調なんだ。今日も家で待って
るし」

「同棲まで！？」

…ノーコメント。

アタシはとっとと退散しよう。

恋狐に餌あげなきや。

「兄ちゃん、アタシもう帰るからー」

「あゝ、恋狐に遅くなるって伝えといてー」

…まあ、間違いじゃない。

了解の意で手を挙げて、アタシは一步踏み出し…、

「…あ…！ …くっ」

立ち眩みの時と似てる、…眩暈。

ベロとか指先とか末端が激しく痺れる。

痙攣してるのも分かって、こんな姿晒したくないとも思ってる。
だって頭の中は驚くほど冷静で。

でも身体は言うことを聞かない。

目の前が霞むように曇って、頭痛がひどくなって、

「風…！！？」

…あ、兄ちゃんが叫んでる。

—いかん、コレは倒れるわ。

ハゲ校長のグダい話聞いているときみたいに。

って思った瞬間には曇る程度だった視界の白が脳裏一杯に広がっ
て、

アタシは意識を失って、

床に頭を打ち付けたのだけは分かった。

そして異世界

お母さんはアタシが小さい頃に死んだ。

もともと両親は離婚していて、兄貴とアタシは母さんの方に引き取られた。

兄ちゃんはその状況なのに暴走族なんかに参加していて、しかも頭^{ヘッド}なんかやっていたみたいで。

小さい頃のアタシは兄ちゃんの顔もマトモに知らなかった。

それで、母さんは悩んでいたんだと思う。

母さんは働かなくなって、お酒に溺れていった。当然お金なんか無くなって、ウチはみるみる貧乏になっていった。

ある日、朝起きると母さんがいなかった。

アタシは家でずっと待っていた。ご飯が無いのも慣れていたし、普段と違うのは独りって事だけ。

一日が暮れて、たまにくるよく分からないお兄ちゃん来た。

…その人は、凄く怖い顔をしていて、

『母さんが…死んだ』

—そう、呟いた。

その日の夜は、その怖い人とカップラーメンを食べて寝た。
次の日も、起きたら誰もいなかった。

夜になって、暗くなって、知らないお兄さんが部屋にきた。髪の色が違ったから誰だか分からなかったけど、よく見たら昨日のお兄ちゃんだった。

いつもの服じゃなくて、きちっとしたズボンと白いシャツ。

でもそのシャツは赤く汚れていて、お兄さんの顔にも傷があって、ちよっと怖いのと心配なので分からなくなった。

『…風、俺学校やめて働くよ』

どうしてわたしの名前を知ってるのか分からなかった。

『俺頑張るから—。風、独りで寂しいだろうけど…』

わたしはいつもひとりだったから大丈夫だと言うと、何も言わずに抱っこされて、謝られた。

…―なんてことを、今思い出した。何故だろう。
多分、こんなに長い間ぐるぐるした白い空間に居るからだ。

夢を見ているような。

アタシの体が見えないのは、多分これがアタシが見ている映像だからだろう。

だけど夢では無いと分かる。アタシはずっと移動しているんだと
と、突然視界が開けた。

「…どゆあッ!?　ぎゃっふ!」

…そして落ちた。

「…いって……。…んだよ…なにこれ、どんな状況?」

…あれ?

声が違ったような。今喋ったのアタシだね?

痛いぐらいの視線を感じて、恐る恐る見上げるとあんぐりと口を開けた数人の大人。

「…うお、ウォーレン様…?」

ウォーレン？誰？

そのアホ面かました大人達は皆さん白いローブのような者を着ていて、手には何やら怪しい分厚い本を持っている。

…あれ、何だろうこの感じ。

「…き、きつとどこかー！ 違う場所に召還なされたんだ！！ 皆探せ！！」

妙な団結力で周辺を探索し始めた。だがテンパっているらしく、壺の中とか絨毯の下とかを捜している。

…いやいや、勇者が人間ならソコには居ないだろ。

「あの…手伝いましょうか？ …！！」

あれ、やっぱ声…

…しかもアタシが喋った瞬間、ローブの人達は一様に肩を跳ねさせた。

立ってみて分かったが視点も違うし。

なんか高いし。

「ちょ…嘘嘘嘘」

若干焦って、薄暗い部屋から鏡を探した。

―あった。装飾過多なのは放つといて、それを覗き込んだ。

「…でええええーっ！！！？」

つい、力の限り叫んだ。

だって鏡に映ってたのはアタシじゃなくて、白髪の美形なおにーさん。

「デメエらどういふ事だゴルア！！！！！」

声怖っ！！

うわぁ、声変わりしていらっしやる。

アタシは手近な白ローブに掴み掛かった。

「うわぁぁぁ！！ おお落ち着きになられてくださいウォーレン様！！
いや、勇者様！？」

「こりゃあどーゆー事だア！？ ああん！？」

「し、しばし！ 暫しの御猶予を！！！」

必死の形相で待てつつうんで、手を離してやった。

白ローブはさっさかと仲間の元に行つて、何やらゴニョゴニョ話し合っている。

苛立ち100%で、腕組みでそっちを睨み付けていると、総勢3人の白ローブが一斉にこちらを向いた。

「「「申し訳有りませんでした勇者様ーッ！！」」」

そしてオールスライディング土下座。

「謝るのは当たり前だろうが。…あのさあ、そういうのは不要ないんだよ」

ああ、…アタシの声スゴく格好いい。

「いいから状況を説明しろ？」

びきん、と。

額に血管が浮いたのが分かった。

この人（前書き）

今日は暑くて、生きているだけで体力へばりました。
……冬が好きなんです。

この人

この身体は、ウォーレンっていう名前のおにーさんの物らしい。

そんなもってアタシは勇者として召還され、頑張って魔王を倒す。
そんな運命さだめの救世主。

魔王は世界のどっかにいる。魔界とか何とかって所。
だけど怖くてだれも行きませんで、なんでアタシにとばっちり。

………それで、簡単に『はいそうですか』ってなるか？ フツー。

「ーオイ。ンな事興味ねえんだよ。

アタシのホントーの身体は一体どこだ。なんで勇者なんて貧乏くじ
がアタシなんだア？

…フツーそれって男がやるんじゃないの？」

うえ、この声でアタシって気持ち悪い。

一人称変えようかな。

「いえあのー…実は勇者選びって言うのが今回ランダムでしてー…」

「適当って事？」

「ちがつ…!?!? 違いますとも!!! そそそ…そんな事がある訳…!!」

「そうか手抜きか。…よし、この国の最高責任者連れて来い。とりあえずお前クビにしてからソイツぶん殴る」

「い、いけませんって勇者様!!」

「アタシ、処刑されても本体此処にないから多分死なないでしょ。ほら、早く出せよ。」

「…あームシヤクシヤする。代わりにお前殴って良い?」

「うああああ!?!? 嫌です嫌です!! 勇者様に殴られたら死んじやうじゃないですか!?!」

「死なねーよ。こんな女のパンチなんか気絶するくらいで大して…あゝ、アタシ今男か」

男の本気パンチは確かにまずいだろう。

前歯が折れたり鼓膜破れたり。そんなの色々冗談じゃない。

…しかも、勇者ってからは余計な力が添付されてる可能性が高い。

…もう、何で勇者がよりにもよってアタシな訳?

もっというじゃん。人間なんか68億人もいるんだぜ? 日本人

に絞ったって約1億。女にしたってその半分。

こんななに当選する率なんて、隕石が頭上に落ちてくる率より低いよ。

っつかし…、ランダムってのはなく…

「……ヨボヨボのおばあちゃんとか来ちゃったらどうするつもりだったんだろ」

杖で戦うのか？

「はい？」

「…え、あゝ…こっちの話。…だったんだがー…」

これは訊いた方が良いのかも知れない。

単純に、コイツ等を罵る口実が増えるかもしれないし。

「―勇者ってのは何で決めてんの？老人とか幼児とか来ちゃったらどうするつもり？」

「…あゝ…。い、いやあゝ…それはですね…」

「ホラほら言ってみろよ。所詮ろくでもねーだろうけど」
アタシが言くと、白ローブは言い難そうに語尾を濁す。

「…いや…、そのう…。ランダムって言っても、それは実際は違ったりとか…違う無かったりとか」

「良いから言ってみろ。…あ、大丈夫。拷問に掛けたりしないから」

「う…、…いやそれが―今回だけはその…私共の下っ端が適当に選んで…：たまたまあなた様を…」

「―ふうん。それはそれはすんごく面白い冗談だねえ。いいわゝホントに傑作。…：さて、この世に残す言葉は？」

手近の壺をひよいと持ち上げると、白ローブが泣きそうな声で言

う。

「怒らないって言ったじゃないですか!!」

「言ってねエよ。拷問に掛けないって言っただけ。…大丈夫苦しめたりしないから」

…にしても、それなりにデカくて高価そうな壺を片手で―とか、やっぱ不要ない力がくつつけられてますな。

あーめんどい。

「…だ、だって!仕方無いじゃないですか!!　なんか誰も勇者召還なんかに関与的じゃない―!!」

「ちょー!レスタ:」

慌てふためく白ローブ×2と、はっとして顔を蒼白にするレスタ
ーって呼ばれた白ローブ単独。

…あ、そういう事ね。

今理解。

アレでしょ、ンな事にゃア興味ないって。

おかしいと思ったよ。勇者召還って大事な儀式じゃん?なのに立ち会ったヤツらは3人。

こんな埃臭い小部屋で、胡散臭い白ローブに呼ばれて。ついでに嘘臭い黒魔術の本ですか?

クサイでしょうよ。それはにおうわ。

…ああ何かもう面倒臭くなってきた。

どうでもいいやこんな雑魚共。とつとと工程済まして旅に出て魔王倒して帰ろうぜ。

「で、王は？」

「……は、はい？」

喚びやがった報復とか、もうそんなのも面倒くなくてきて、アタシは投げやりに言った。

「あれ、王政制度じゃないの？…じゃあ何、大統領？　―別に何でもいいよ。この国で一番権力があって、勇者召還だっけ…を、許可しやがった奴。」

「…あ、…ああ、陛下の事ですね。それならこの城の広間におわすかと」

…陛下って…やっぱり王じゃねえか。

まあ何でもいい。とりあえず会って話して旅に出る。そうじゃなきゃ始まんねえ。

「アタシをその陛下の所に連れてけ」

「…わ、私をクビにしてから陛下を殴ったり…」

「しねーよ。…ああ、じゃあ腹いせにこれ割っとくか」

と、片手の壺を床に落とした。

ひゅんと風を切り、派手な音。

高価そうな壺が砕け散った。

「うああああ！！　由緒ある封魂^{ふうこん}の壺がああ！！」

ソイツをはじめとした白ローブは全て、似たような悲鳴を上げた。

…まあ、関係ない。

兎に角この部屋から出よう。もう良い何かコイツ等イライラする。理不尽な気もするが。

その広間まで自力で行ってやる。

アタシは光が漏れている所にドアを見付け、部屋を出ようとした。
…が、

「あれ、」

何か引っかかっている。出られん。

…何だこれ。

アタシは上体を捻り、首を回し、必死に後ろを見た。

ドアに引っかかっているのは、左右に突き出した長い…剣？

「いや…長すぎだろ…」

それは柄が目線位に来て、鞘の先は膝よりも下にある。どう考え
てもデカすぎだ。

しかも、それはクロスして2対、ベルトで背中に固定されている。
こんなん2本持っていてどうしようって言うんだ。

一旦後に下がり、カニ歩きでドアからすり抜けた。…ふう。

「…あひっ!?! ゆ、勇者様!?!」

「……あ?」

低い位置から声がした。見下げると、ちっこい子供の白ローブが
いる。

「…まだ居たのかよ白ローブ。―ってか、アタシがウォーレンじゃ
なくて勇者だって何で知ってる」

「…ちちっ違いますっ！！　ぼくは盗み聞きなんてしていません！
」

してたんか。盗み聞き。

「…じゃなくてうああああ！！　言っちゃったああ！！　ぼくのバカ
ああ！！」

…何だよこのちびっこいの。…一人でうるさいな。
アタシは王のいる広間に行きたいんだけど。

「…ごめんなさい勇者様！！　あなたをお選びしたのはこのぼく
ですッ！！」

早くどっかに…って―はい？
今…コイツ何て言いやがった？

「―もっかい言え」
「あ、あなたを選んだのはぼくです！！！！！！」

―コイツ、死刑。

「テメエかあああ！！！！　アタシに面倒事を押し付けやがったの
わああ！！」

「ひいいい!!? ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!
だって勇者様はスゴく強かったんです!! 女の人なのに強かった
んですう!! だからお呼び申し上げまして―」
「知るか! このクソガキ締め上げてジョーズのエサに―:は?」

『強かった』んです?

なにそれ、:どっかでアタシを見てたって事?

「:おいクソガキ。―アタシを見てたのか」

その問いが唯一の自分の救済策だと思ったのか、喰らい付く様に
答えてきた。

「そうです見えました! すごいですよね! 何人もの人に囲まれ
て乱暴されそうになったのに、一人でみんなやつつけちゃうなんて
!!」

「:.....」

:.....あゝあ、やっちゃったなコレ:。

アタシ、あの時何で暴れちゃったんだろう。

いや後悔はしないけど。

あの状況で大人しく犯されるとか冗談じゃないし。

てゆうか、あの瞬間にケンカしてた奴なんかやっぱり山ほど居た
んじゃない? 何でアタシ?

いや:終わりが見えない自問自答は止めようか。:結局はアタシ

の悪運だ。

「…もう良いや、どうでもいい。諦めましたから、アタシを王のいる広間まで連れてってくんない？」

「ふ、ふえ？　王…って…陛下の所へですか？」
「ん。」

どうやらこのチビ白ローブは本当に申し訳無く思ってくれているらしく、文句も無く先導してくれた。

…あゝあ、めんどくさい。

王って陛下って…(前書き)

昨日は暑かった癖に今日はクソ寒いです。

春が好きです(↑オイ

王って陛下って…

「…えと、こちらの階段を登った所に陛下のおわす広間があります。
―その、勇者様？」

…本当に行かれるですか…？」

「…本当も何も行かなきゃいかんだろうよ。

異世界から召喚された勇者ってまず会いに行かなくちゃいけないんじゃないの？ 王に」

「…そうですね、会いますよね。…で、では！

ご健闘をお祈りいたします！！ これにて失礼！！」

言い捨てて、ミニマムな白ローブは走り去っていった。

…あれ、何だろうこの見捨てられた感は。

そんなやばい人なんかへーかサマって人は。

ひとまず会ってみようか。会わなきゃ分かんないしね。

赤い絨毯の敷かれた豪華な階段を、一段ずつ踏みしめ、登って行く。

このウォーレンってあんちゃんがどんな人物だったのかなんてアタシの知る範疇じゃないが、城の警備兵みたいなのが見向きもしないことから、コイツが頻繁に此処に出入りしていた事は窺える。

思えば此処に来る最中はオール顔パスだったし、案外コイツ大物なのかも知れないな。

「…うおっ!？」

階段を登り切ると、急に目の前が開けた。

必然的に訪れた者は広間の中心に出る造りになっているらしく、アタシはその場の視線を一身に集めていた。

「…ウォーレン?」

綺麗な声に、またビビってしまう。

「…あ、えと、ウォーレンじゃないです。色々あって今は―」

…と、声の方を向いた。そんで、また若干驚いた。

其処にいたのは、豪華な衣装の女の人。

細かく絹のような金髪に、煌びやかティアラを乗せてる―王妃さん?
ん?

ピンクに近い瞳の色がスゴく綺麗で色っぽい。あれだけ豪華な服でも、存在感は衣装に負けていない。
すごく次元の違う人。

「―?」

…あ、いかんいかん。見とれてた。

「い、今は勇者です」

「まあ。…それでは召喚師達は勇者召喚に失敗したのですね。―と、なると、貴方はウォーレンではなく?」

「な、風です。木菟、風」

「ミミズク? その様な名なのですか?」

「…いや、風が名前で」

彼女はにっこりと笑った。ずっきゅーん!

「―では、ナギ? 貴女には申し訳ないことをしましたね。それと、そのウォーレンという男にも」

…そこで、王妃さんは一度咳払い。

隣の、ハゲ散らかした如何にも大臣な人に告げる。

「皆、一度出払いなさい。この者と話がしたい」

「陛下! …しかし…この話が本当かどうか―」

「もしこの者が勇者でなくとも、ウォーレンには違いない筈です。彼は神の膝元に住むエンジェイ族。彼に置いた信用は、この国総ての者も、私も―。…勿論、貴方も揺るぎない。違いますか」

な、何か大層な事になってないか?

「しかしウォーレンに化けた魔物——と言う可能性もありますぞ」
「彼がそれを許す筈がありません。それは貴方もご存知の筈。」

「……女王陛下はあの者を買ひ被り過ぎますな」

——話は終わった…のか？

一言大臣が嫌味みたいなのを言い、他の兵や使用人を引き連れて出て行った。

余りに広い空間に、美人サンと二人きり。

…いや、アタシは一応女だし、身体の性別は違うけど…でも、女の子に惚れるような奴じゃない。

けど、これだけの美人だったら生きとし生けるものは全てうつとりすると思う。

という経緯でアタシは軽くドキドキしてる。

「——私は愚かでした」

彼女が立ち上がり、立ち尽くすアタシは呆然とそのモーションを見ている。

「ウォーレン——！」

王妃さんが走り、
アタシの胸に抱き付いた。

それで勇者

「…ナギ？ 申し訳ありませんね…この中身はナギなのですよね」

「―あ、あの…」

「あなたには悪いのですが―暫し、この愚行をお許してください」

もう訳が分からないのだが。

アタシの胸にすがりついたまま、王妃さんは動かない。表情も角度的に見えない。

「…私は愚かでした。ウォーレンは―もうこの身体にはいないのですね。」

…もっと早急に告げていれば…せめて私の気も済んだと言うのに…」

―ああ、髪めっちゃイイ匂い。

…じゃなくて、

「王妃、さん…？」

「…ウォーレン」

顔を上げた王妃さんの目は、きらきらと潤んでいて、アタシの頬をゆっくりと撫でた。

「貴方はいつも、そんな風に困惑した顔をしましたね。
『私は神の使い。色恋は禁じられております』——そんな風に断られて——」

うわー…、何かアタシ悪者みたいじゃん。

この身体の主は王妃さんとそんな関係でしたか！
まずい、だからミニマム白ローブは止めたのか。もしかして勇者
召喚に協力的じゃないのもコレの所為っすか。

てか王妃さん、コレって浮気じゃね？

「……さて、未練は断ち切らねばなりませんね。
何時までも引き擦っていても公務に支障が出ます。」

こ、公務？

王妃に仕事ってあるの？ 王の隣に座ってるだけじゃないの？

あ、しかもアタシが用有りなのは王妃じゃなくて王だ。
益々こんがらがった事に…。

「あ、あの」

「ごめんなさいナギ。あなたには関係もない私事なのに」

離れた王妃さんは、変わらず優雅に微笑した。

「…あ、いや。それは大丈夫です。それよりーえと、ご主人は居ますか？」

王の呼称に困ったアタシだった。

「？ 私は未婚ですが？」

「え、うっそ!!」

え、えええ？

…うわあ、そーいや誰も王の事なんか言っていなかったな。陛下陛下下って…。

…ま、まさか…………

「女王陛下…ですか」

「ええ。―自己紹介がまだ済んでおりませんでしたね。
私、この国を治めさせて頂いております、ディルア、リルグレイ・
リドール23世と申します」

でい、でいるあ…………？

「…あの、アナタを一体アタシは何とお呼びすれば―」

「お気に召すなら何とでも？ いっそ呼び捨てでも構いませんよ。
…ああ、大臣は煩いでしょうけれど」

あのハゲ散らかした奴の事か。

綺麗な…、えっと…陛下さん。…は、つかつかと玉座っぽい所に
戻った。

「―靴を脱いでも構いませんか？ 一日中此処にすまして座っている
のには流石に肩が凝ってしまっ

別に構わんが。

黙ってアタシは頷いた。

すると、綺麗なお御足が靴という拘束具から抜け出る。

：あれ、でも確か靴脱がない文化の中での『靴を脱ぐ』って行為は、パンツを脱ぐぐらい恥ずかしい行為なんじゃなかったっけ？

「あなたの本体はどんな者でしたか？」

「いや：陛下さんに比べればそれはもう：。ブスで禄でもない不良少女でしたよ。

ケンカしか脳がないよーな」

「―そんな事を仰らずに。：でも、生まれ持った身体と環境には愛着があったでしょう？」

うーん…。まあ、無いっ言ったら嘘になるけど。

だけど、それ程元の性別とか身体に未練はない。別にあの身体に自分なりの価値とか見出し出してなかったし。

「：ナギ？ 本当に貴女には申し訳ないことをしてしまいました。

召喚師によれば身体ごとという話だったのですが：どうやら、手違いで身体は向こうの世界に置いてきてしまったようですね」

はああ、と。眉間に皺を寄せ、陛下さんが頭を抱える。

「：しかしながら、貴女には旅に出て魔王に打ち勝って貰わねばなりません。

：世界中の不安の高まりと比例して、勇者への期待も高まる一方で

す。

此処で貴女を送り返すなんて真似は出来ません…。

私は魔道には疎くて、…いや、正直全く白知の状態で、貴女を送り返せるかどうかすら分かりませんが…。

しかし、もし出来たとしても―其れだけは避けねば。最悪…この世界情勢にも関わらず、我が国を含んだ大戦が起きかねませんし…」

なんか、もうコレが手違いで申し訳なくなってきた。

いやいや、アタシの所為では無いんだけど。むしろアタシは犠牲者なんだけどさ。

「つまり、…我が国は後には引けない状態です。

貴女には悪いのですが、…出来れば早急に、―そう、明日にでも旅へと赴いていただけませんか？」

……いや。

ぶっちゃけ嫌だよ？

だってやる気なら送り返せるかもなんでしょ？

モンスターとの血みどろの戦いとかに身は投じたくないし。

幾らコレがアタシの身体じゃなかったとしても、痛いモンは痛いだろうし。

だけど、…だけどさ。

帰ってもアタシはケンカ三昧の日々でしょ。

帰んなくてもバトル三昧でしょ。

―それって別段大差なくね？

それに、この陛下さんが色々困るのは…何か嫌だし。

―ああ、アタシのお人好し！

らしくねえぞこの…！！

「…分かりました。」

アタシが言うと、陛下さんがピンクに澄んだ視線を上げた。

「勇者として召喚されたからには…アタシだって頑張りますよ。
アタシ短気なんで、グズグズしてるヤツは嫌いなんです」

顔を上げた陛下さんの表情がほぐれ、
ゆっくりと、笑顔が作られる。

…だから彼女は満面の笑みで

「―本当に、本当に恩に着ます。
ありがとうございます、ナギ」

…それでアタシは、こんな風に笑ってもらえるなら勇者なんて容
易い―なんて、思ってしまった。

アタシは今まで、ロクな表情を見てこなかったから。
笑うにしても嘲笑だったり。それは大体殴り倒して始末してたし。

だから、誰かの為に戦うのも悪くないかな。…なんてね。

「では、明日の旅立ちに向けて―有らん限りの持て成しをしましう。

世界を救う勇者に。

…そして、勇者にその身を捧げる、神の使いウォーレンにも」

で、アタシはその晩、一生で一番豪華であろう晩ご飯を食べたのだった。

味の方は…まあ。

元の世界の味覚センス及び価値観とは随分ズレてる感じでした。

…そこだけはアタシの味音痴に感謝って事で。

ジード

昨晚、まあまあ仲良くなったあのミニマムな白ローブと話をした。

大まかには、アタシが急の急に旅立つ事についての不満、上司のグチ、家庭事情など。そんな取り留めもない様な事ばかり。

以下適当に回想。

・ ・ ・

『急すぎると思いませんか？ 明日ですよ？』

ちっちゃい頬を膨らまして、ミニマム白ローブがぷりぷり怒る。

『まあ…アタシとしては早く出たいから好都合なんだけどさ』

現状の心理としては、全てをパッパッと済ましたい。そんなところ。

正直、飛ばされた直後との変化なんてほとんど無いのだ。

…そこに、ちょっとした親切心の欠片みたいなのがプラスされただけ。

『そんな…ぼくは困りますよ!!』

受け答えもめんどくさい。アタシは投げやりに言う。

『はぁあ？ …何で』

『勇者様にお教えしたい事が沢山あるんです！！ —大きな声じゃ言えないことも』

—大きな声じゃ言えないこと。

そのワードに、アタシは何故か無性に惹かれて、耳を貸した。

『ほお？ …—例えば』

『その身体の持ち主のこととか。コレは結構基礎知識として必要だ』

この身体…ってのは、ウォーレンとかって呼ばれてた兄ちゃんだ。一回だけ見た鏡にその姿を見て、ホントにおったまげたよ。超美形。

『…このイケメソの事か』

『いけめそ？』

……アタシの虚言に付き合ってくれるな、恥ずかしい。誤魔化せ誤魔化せ。

『…いや気にすんな。ホラ、続き』

促すと、思い出した様にミニマム白ローブは続けた。

『あ…ああはい。…その身体の持ち主はウォーレン様という御仁なのですが。フルネームはウォーレン・ジード・カーデイスといい、

神の使いエンジェイ族の―』

『そういうのはイイ。興味ない。…ソレが大事な基礎知識？』

『…ま、まあ一部です』

『うっとおしいから大事な所だけ簡潔に』

アタシが短気なのは存知の事実の筈だ。

つか必要か？

コイツのプロフ。

…いや不要いらなだろうが。

『そ、それですが…、ウォーレン様は勇者様のお供として、そして護衛として辺境からおいでくださった方なんです。

ウォーレン様だけは勇者召喚に積極的で、陛下にも随分と掛け合ってくれたみたいなんですけど…』

『けど』

『…けど、陛下はそのウォーレン様に夢中になられてしまって、難癖付けてなかなか勇者召喚を許可しなかったんです。

それで、世界も国民も待ちくたびれている状態で…』

『…それで今日の今日出発か』

『…はい』

しゅんと項垂れるように下を向く。

別にあんたは悪くないだろうって頭を撫でたい衝動に駆られた。ペ
ットみたいな。

ミニマムは不意に頭を上げ、拳を握る。

『非道くありません!? 勇者様はこの世界での貨幣も法律も一般常識も……それはおろか武器の名前も性質すらも知らないのに!!』

『……馬鹿にされてるのかなアタシ』

『それなのに、何にも知らない勇者様をほっぽりだすなんて!!』

『……まあ……悪気は無いんだろ。あの人だから』

陛下さんが下心があってアタシを、——ましてやこの身体の主ウォーレンを送り出すとは思えない。

あの人にとってコレは苦渋の選択なんじゃないかな。

『陛下の人格は破綻しています! 私情に任せて勇者召喚を引き止めるなんて!!』

まあ……陛下としてどうかとは思うけど。

ああ、そうだ。この罪悪感が正規かどうかの確認、しておこう。

『……あのさ、ひとつ訊いて良い?』

『? はい?』

『そのウォーレンってのはさ、陛下さんとは……どうだったの。陛下さん側からじゃなくて、コイツ側からは。』

アツサリと。

何でもないことのようにミニマムは答える。

『……ああ、全く興味無かったみたいですよ。適当な理由で断り続けたきた様なので』

それを聞いた瞬間、罪悪感とか場違い感とかが一気に軽減された。

『はー！軽く一安心だわー。肩の荷が軽くなった…』

『…どうしてですか？』

『ーん。こっちの話。…それよりさミニマム白ローブ。…魔法、つて…あるんでしょ？』

『ぼくそんな名前！？　ーいや、ありますけど…！』

『ちょっくら教えてくんないかな。…なに、時間もないからさわり程度で構わんよ』

『あ…ぼく魔法は使えますよ！！　ー才能は皆無ですがね。はっ』

『なーにそれで十分さ。さ、魔法ってのはどーやって使うんだ？』

『…魔法はですね、要はイメージなんですよ。ほら、それで魔力のイメージをー……』

『ん、コレで良いのかな。わお！出来た出来たコレってー……』

・ ・ ・

陛下さんを始めとする城の従事者全員に見送られて、アタシはジブリアニメのワンシーンさながらに城を出た。

ちなみに今現在、日の出前。

…陛下さんの話によるとー以下は要約。

混乱や開戦を防ぐために勇者召喚の報は出す。

が、アタシが勇者だって事は公には言わない方向でやってくらし
い。

理由は言うまでもなく、色々ややこしくなるからだ。

…確かにこの外見じゃ勇者ってか勇者の右腕だし、陛下さんの言
う事はごもつとも。

それにアタシはめんどくさいの嫌いだから、それは凄く良い案だ
った。

よって大人しく賛成。陛下さんの言う事に従うことにした。

…との事で、城下町の方々にさとられないようにこんな早起きを
した訳です。要約、以上。

……とは言えど、こんなに早く町に出てもやることもない。何せ
店も開いてない。

究極に暇だ。

パン屋…か何か、看板のイラストから想像するに多分パン屋…の
煙突から、白い煙が昇っている。

朝特有のひんやり澄んだ空気を喰らうが、暇潰しに適さない。だ
って暇が紛れるわけでもないし。

誰か話し相手いないかな。ケータイもある筈がないし、コンビニ
も無いから立ち読みも出来ない。

「…あゝ…。疲れた…」

考えるのにも歩くのにも疲れた。

アタシは人目に付かない裏路地に入り、こそこそと辺りを窺う。

…あったあった。ちょうど良い木箱。寝不足だったんだよね。

…そうそう、これを2つくらい並べてその上でゴローンっと…

『―みつともない事をするな!!』

「うひっ!? 誰!？」

咄嗟に飛び起きて周囲を窺う。

人気は無い。

…けど、…絶対に空耳じゃ無いでしょ…。

形容しがたい悪寒と悪汗。急に朝の薄闇が恐怖感に変わる。

扱えないとは薄々解りながらも、背中に装備されていた2本の剣に手が伸び…

『―それを扱えると思うのなら抜いてみるがいい。…抜いたとしても相手がいないがな』

「わわわっ!!! また!?! …こ、こんな所に居ないでさっさと成仏しやがれ!! 来るなら来い! 相手ならすっぞコラァ!!」

『…昨日の朝までは、生きながらに幽霊扱いされる日が来ようとは…思ってもみなかったな…』

つかどこに居るんだよ!

場所が特定できない。どこか言うよりは…何て言うか頭の中で

響いてる感じ……—ん？待て待て頭の中？

「…も、もしも…し？」

『やっと落ち着いたな。そうでないと話が通じん』

耳から入るアタシの声と同じ。…いや、大分こっちの方が凜々しいな。

『—お前の言動、全て見聞きしていた。…世界を救う勇者が聞いて呆れるな』

「…んだよテメー！うっさいな、アタシだって色々不便なんだよ！！
大体人を馬鹿にする前に正体表したらどうなんだ！！」

『—正論だ。名乗らせて貰おう。』

—私はウォーレン・ジード・カーデイス。

エンジェイ族を代表し、勇者殿の護衛となるべくこの地へ赴いた。
…が、まさかお前の様な口の悪い小娘が勇者とはな』

「悪かったな口の悪い小娘で！！ 勝手に言ってる！」

…ん？ウォーレン？

どっかで聞いたなそんな名前。

—あゝ！！

「お前この身体の持ち主か！！」

『…そうでなければ何処の物好きが内面から話し掛けたりするものか』

「何で今更になって—。陛下さんがお前のために泣きそうになってたぞ。女泣かすなんて最低だな！！」

…そういうアタシは、既に戦いの数だけ相手を泣かしています。
殴るとかは跡が残るからね。精神攻撃で。

『勘違いするな。出ていけなかったんじゃない。出ていきたくなかつただけだ』

「尚更悪いじゃねェか」

どうやったら好印象に解釈できるんだよ。誰か教えてくれ。

『…私はあの方が苦手だな。』

勇者召喚を引き留めたり召喚師の説明を省いたり、…私ごときに現を抜かしている事を分かっているのだが…どうにも』

「…アタシは好きだけどなあ、あの人」

段々と空が明るくなってきた。人の声もいつの間にかまばらに増えている。

着実に時間は潰せているらしい。

『…しかし、お前には文句ばかりは言っていられないな。あの時壺を割ってもらわねば、もしかしたら本当に幽霊に成っていたやもしれん』

「…………アタシ、壺なんか割ったっけ」

…覚えてないな。ちよくちよく破壊活動してるから。

『礼を言うぞナギ』

「…まー悪い気はしないな。割った事にしとくか」

割ったって言うてるんだから割ったんだろう。別にどうでも良いけど。

「…ああ。じゃあさあ、アンタが勇者に成りすまして世界救ってよ。アタシそれまでバトンタッチして中で寝てるからさあ」

コイツの方が、100%勇者に向いてる。
性格、喋り方、そしてハードボイルド。完璧。

『……それが、だな』

「ん？」

『私は『表』に成れない…らしい』

「え…？えええええーッ！？」

な…何で…！

どうして…？

完全に人任せモードだったアタシは、軽く絶望。
あたしゃそう簡単に納得しないよ…！

『…実は何度か試みてみたのだが…無理だった。どうやらお前の自我が強すぎて身体を乗っ取れないようだ』

「うっそおー…！！　じゃあアタシやっぱり勇者あ…？」

『その様だな。やるからには頑張ってくれ。出来る事は尽力する』

「…くっそ！楽しようと思ったのに…」

「はっ。残念だったなナギ」

…まー…、出来ないモンはしょうがないー…。幾ら駄々捏ねたって出来ないんだから…。

「…でー…、さあ、アタシ、この武器は使えないと思うんだよね。早速アタシ用の武器の買い物、レクチャーしてくんない？」

『む、案外頭が回るな。…了解した。出来る事なら致そう』

某ゲームの仲間が出来た音楽とコマンドが脳内に表示される中、アタシはすっかり活気付いた市場に向かった。

戯言、買物、入手（前書き）

長く書きすぎました…。

数話分を一挙公開！！（黙れ

戯言、買物、入手

資金はある。陛下さんから戴いた、餞別という名の大金。

ぶっちゃけこんなに不要ないだろとか思ったが、ジードによると勇者への餞別は金額が決まっていて、本来は武器防具全て揃えて貰うことが前提の金額だから――まあ、アタシが規格外って事らしい。

だって元装備は初っ端っから完璧な訳で、金を使う必要がないんだよね。

イマイチ通貨の単位とか価値とかは分からないが、それはジードがどうにかしてくれるだろ。

武器屋探して随分歩き回った。…案外楽しい。どーしよ。

紙袋を抱えた綺麗なお姉さんが挨拶してくる。ちっちゃい子供が手を振ってくる。

そしてご老人が有り難げに何かを祈ってくる。…のはコイツが神の使いだからかも知れんが。

このハピネスな気持ち、一体どうしたら良いんだよ。
…うーん、神の使いかあ…。

「…なー、神の使いって事はさ、天使みたいな物なの？ ジードの民族って」

『……ジードは幼名だ。気恥ずかしいから呼んでくれるな』

幼名…って、源義経が牛若丸みたいな？

「でもウォーレンって長いし呼びにくい」

『しかしそれだけは勘べー』

「ーで、どうなの。そのー、エンジェイ族ってのは」

『………』

頭の中で、小さな溜息が響いた。

『…我々のその称号にはな、根拠は無いんだ』

「え、じゃあ嘘なの？」

『…嘘…ではないが…。…神話というか、創世記では我々は神々の使いとされている。』

…まあ、そう呼ばれるだけの根拠が有ると思うが。』

んー…。確かに、白い髪にシルバーの瞳は神々しいな。

てか、白基調の重装備ファッションからして凄そうな感じがする。このクソ長い剣とか、シンプルながらに凝ったデザインのマントとか、ビーズみたいなのがぶら下がったバンダナとか。

……何かもう、冒険後期って感じ。

ジャンプして着地した瞬間の重量がスゴいんだ。コレ。

『…まあ、地元というか故郷では宗教的な感じだな』

「…ふーん。そーなんだー。ジードも信じてんの？」

『……………僅かに』

…え、何この間。

「し、信じてねーの？」

『信じていないわけではない。盲目的に鵜呑みにはしていないだけだ』

……………ああ、そういう冷めたアレね。

「許される訳？」

『演技力があれば』

…うわあー…。何だコイツ。

『…そうだなギ。お前はそろそろ一人称を変えろ。

私の身体でアタシアタシと下品な人称を使われては強わん』

「ああ、それはアタシも考えてた。…何が良いかな」

『ひとまず性別を考えた物なら』

…せーべつー？

うーん…。

「『オレ』…とか。」

『乱暴者に聞こえるな』

「世間体なんか気にすんなよ。お前はオバサンか」

お隣さんがー、とかは決まり台詞だよな。ほんと鬱陶しい。
兄貴が言わなかったから余計にな。

「うーん、オレか。ー良いじゃん。決定！」

言いやすいし性に合ってる。

この容姿でオレってのもアリだと思うし。

『…若干ながら不服だがーまあ…『アタシ』よりは幾分ましだろう』

「だろー？」

っていう訳で、一人称決定。本人の許可も貰った。完璧。

不毛な会話をしている内に市場の中心部付近に来たらしい。旅人らしき装備の人達が増えている。

屋台も、食品中心から装備品系統に変わっていた。

武器を扱う店も少くない。

…さて、

「ジード？ アタ…じゃなくて、オレはどんな武器を買えばいいの？」

『唐突に聞かれてもな…。…普段は何を使って戦っていたんだ』

えゝ、基本素手だけどゝ。使う時は鉄パイプとか傘とかケータイの角とかゝ身近なモノを利用して、如何に大きくそして綺麗にダメージを与えるかが最大のポイントーじゃなくて、

「わかんね。あんまり武器とか物騒なモンは使わなかったし、精神攻撃が主だったから」

『…何だ、その悪質で劣悪で愚劣で醜劣で醜悪な攻撃法は』

「いや、幾ら何でも貶しすぎじゃね？」

そこまで言われたら怒る気にもなれんわ。

『……無難に剣で良いんじゃないのか。ノーマルなトゥーハンドソード……とか』

「投げやり感剥き出しだね。ソレ本気で言ってる？」

『いや、適当だ』

…うん、正直でよろしいね。

て、言われても、アタシにはそれがどんなだか分からない。

ソードって言うからには剣なんだろうが。

「それってどんな？ 扱い難い？」

『…むゝ、そうだな。…剣の心得が無い者は扱え切れないかも知れぬ』

…無い、けどさ。
……わっかんねえなあ…。

『まあ、実際見るのが一番早かろう』

ジードに促されて、アタシは近くの武器屋に近寄った。

「おう、らっしゃい」

店番は、低身長というよりは短身長と言うに相応しいおっちゃん。
小人みたい。

「何だい格好いい兄ちゃん。何か売りに来たんかい？」
「ん？ ……ああ、コレは違う」

どうやらおっちゃんは背中中のツインの剣に目を付けたらしい。

「じゃあ何か買ってくんか。…変わり者も居たもんだ。
何でもあんたの好きなモンまけとくからさ。ソレ、オレに売っちゃ
あくれねえかい」

アタシに価値は分らないが。どうやらとっても気に入られてしま
ったらしく。

いやいや、売るなんて無理。だって…

「売っていいの？」

『駄目に決まっているだろうが』

「うん、だと思った」

「…あ？」

ああ、やべえやべえ。今のアタシ完全に、独りでお喋りしてる危ない人。

「いや、何でもない。それよりオッサン。…その…何だ」
『トウーハンドソード』

「そう、トウーハンドソードっての、見せてほしいんだけど」

「…どんだけ刃物好きなんだよ、あんた」

言いつつも、おっちゃんは適当な剣を差し出した。

「ん、コレがトウーハンドソード。両手剣さ。

…ってエ、あんたは百も承知だよな、ンな事あ」

「ははははは」

差し出されたのは、RPGでよく見る両刃の剣だった。叩き斬るようなイメージの。

乾いた笑いと一緒に剣を受け取る。が、

「わ、重」

けっこー重い。

…当たり前か。プラスチックじゃなくて金属製だ。アルミでもないだろうし。

「そんな業物持つって何言ってやがるんだよ」

「いやあ、相当予想外みたいな。

抜いてみてイイですか」

「おう、ソレは安物だな」

鞘から抜くのも一苦労。

シャアアア―と、擦れるような独特な音がして、銀色の刀身が露わになった。

…うわ、モロ刃物。

「―おい、兄ちゃん。…あんた、全くのド素人だろう」

「えっ、や…：ああ、まあ…ハイ…」

ばれた。

この人だってそれなりに武器を扱える人なんだろうし、そりゃあ…当たり前っちゃ当たり前か。

…不便はないから別に良いけど。

「やっぱその剣売っちゃまいな!! 素人にゃあ勿体無えよ!

…大体、使わないんならあんたにだって只の荷物だろうに」

「…いやあ、実はこれ預かり物なんすよ。

オレのじゃないんで売れないです」

…嘘…ではない。しかし本当でも無い。

この身体の主導権がアタシに有る以上、この剣のイニシアチブもアタシにある筈だ。

…まあ、どうでも良いが。

「…しょうがねえな…今は諦めら。仕方無え、その持ち主に掛け合

う事にするよ。

そんなソードにはそうそうお目にかかれなからな」

「…………だによ」

『…むう、ならば十二分に気を付けねばな』

…何だろう。この奇妙な会話。

「で、オレは結局何を買えばいいの？　コレ、使える気がしないんだけど」

それに、コレでモンスターなんかを切り捨てた暁には、もれなくR指定が待ち受けていることだろう。

『わからん。普段は戦わなかったのだろう？』

「…さあなあ、オレにゃあ分からねエが…」

あんた、いったい普段は何をやっているんだい？」

…おおっと、まさかのダブルクエスチョン。

コレは上手く答えないとマズいぞ。

「いや…普通に素手でケンカかな…」

よし、アタシ完璧。ベストアンサー。

「ケンカって…人は見た目によらねえんだなあ…」

『ならナツクルだろうな。』

―物は試しだ。言ってみろ』

ナックルって…ボールか？

…まあ、言ってみよう。

「その…、ナックルって奴あります？」

「あ？ ナックル？」

…あんた、本当に変わりモンだな。

…あんたにゃあ合わないと思うがね―」

で、武器の詰まった麻袋の底の方からおっちゃん引きずり出した
…多分、あれがナックル。

何て形容するか…籠手、みたいなの…。

腕を覆う形の金属製のグローブ。そんな印象。

ボクシングみたいにモコモコしている訳では無く、指の付根辺り
にはメリケンサックの様な金属が固着している。

それが左右一対。

「…どう使うのこれ」

『攻撃面では殴る系の攻撃力の増強に。防御は直に腕で止める。
基本的に武道家等が好んで使うな』

…ああ、やっぱメリケンサック系か。

サックは使った事無いが、基本攻撃は拳だったし…案外合うかも。

「じゃー…金は有るし…一応それ貰うか。幾ら？」

「買うのか！ …まあ…こちらとしては処分できて丁度良いがね」

…と、いう感じで、かなりお買い得値で買い取ることができた。
—…らしい。アタシには通貨の基準や単位は分からない。

めんどいから分かりたいとも思わないが。

「まいどー」

さて、ワンステップ終了修得。

歩きながら、半ば強引に腕を捻じ込んでみる。

『—馬鹿。留め具を外せ』

留め具？

…あ、この金具の事か？
パチン！！

「お、入った。」

指を通す布部分に指を入れ、外した金具を留める。ジャストフィット。

確かめるかんじで、数回グーパー。

「あれ、結構イイかも」

『しかし剣とは違ってそれは力が直に反映されるからな。
ソード系は武器そのものの攻撃力が強いだけに誤魔化しが効く。だ

から素人から玄人にまで幅広く人気がある』

「…ふーん。振り回せば一応戦えるーみたいな？」

『まあ…そういう事か。それだけにとっても深い世界だ。俄では極め^{にわか}るといつても限りがある』

忘れずしっかり自分のフォローまでして、ジードは

『色々話した気がしたが…。結局はその武器が自分に合っているか確かめたいのなら実際に戦ってみろ。—そういうことだ』

やや強引に、そして半強制的に締めくくった。

戦い、ねえ。

元スタイルからは変わらないから…まあ、間違いは無いだろうけどねえ。

ちよつと気になるのはリーチの違いぐらいでさ。

拳は人生で初めて使った武器だからな。

—ふふ、昔…兄貴といっぱいじゃれ合ったつけ。鳩尾殴る練習とかして。

…ああ、今頃兄ちゃん何やってんのかなー。

「…はーあ」

『—何だ、勇者ともあろう者が溜息か』

…ウルセエってかうゼエなこいつ。

…そうなんだよなあ…勇者なんだよなあ…。

「いや家族が心配してっかなって」

『…しているに決まっているだろうが』

予想外にまともな答えに、アタシは軽く絶句した。

「…アンタもマトモな事言えるんだ…」

『失礼な。私はいつでも正論しか言わないぞ』

「じゃあアンタの常識がズレてんだね」

『……もういい。』

結構アタシのほうが正論じゃね？

『それは―家族は勿論心配だろうが…。だからこそ早く帰るべきで、早くカタを付けるべき―ではないか？』

言い直すようにジードが言葉を繋ぐ。

「…おー」

…うん、確かに―確かにそうだね。

兄貴のことも気になるし。恋孤の事も前言の5乗気になるし。

早く帰った方が良いに決まってるよね。

「ーじゃー。アタシもといオレ、頑張っちゃおうかな?」
『そうだ頑張れ。そして早く身体を返せ』

「一言よけーだし」

アタシはけらけら笑って、

新調したナツクルで掌を打った。

戯言、買物、入手（後書き）

武器屋のおっちゃんの裏設定。

旅の商人。なので品揃えは豊富。

この国に来たのが最近なので、国内で相当に有名なジードを知らない。

…と、いう、需要のない設定です（笑）。

俺

風がぶっ倒れた。

俺は一瞬途方に暮れたが、職場のみんなが『店長は帰っても大丈夫ですよ!!』って言うもんだから、風を前に置いてバイクで家まで帰った。

完全に違法だ。バイクでこんなにハラハラしたのは髪が赤いとき以来かも知れない。

家に帰って、風をベッドに寝かせて、ケンカの傷にバンソーコー貼って、それで、風呂に入ろうと腰を上げた。

「―いちちちちち…、俺もトシかな…」

まだ20代前半なんだけどな…。いや、ギリで。

ああ、そうか。恋孤にごはんあげなきゃ。

「ハムフードハムフード…」

陶器の皿にハムスターフードをカラカラと入れる。と、釣られて恋孤が巢から出てきた。

もこもこしたボディ。のんびり緩慢な動き。中身が無さそうなアタマ。…かわい過ぎる。結婚してくれ。

―ご飯の時間にやあちよつと早過ぎたが…ハムスターだから貯蓄するだろ。ほら案の定。

…ここら、もう入らないだろう見ても。

―やっぱ俺の彼女だあ。かんわいーもん。

…いや、恋孤オスなんだけど。

「……………さみしーヤツだよな俺って…」

せかせかと巣箱に戻る恋孤を眺めながら、一人呟いた。

風、大丈夫だよな…。

俺はエアコンのスイッチを入れ、風呂に向かおうと立ち上がっ…
……………！？

「…う…くー！…！」

―ヤバい。立ち眩み。

何かに捕まらなないとこのまま倒れる。…が、手近に背の高いモノが無い。

痺れとか眩暈とかがピークになった瞬間、体が傾いて、倒れた。

床に突っ込み、しかし目の前が白く染まる感覚は軽減どころか悪化し、

真横になった景色は消えた。

気絶したのだと理解した。

チェンジ！

アタシは、冒険に出るつつたただっ広いフィールド：みたいなのを想像してたんだけど、それはどうやら違うらしい。

『―この町では城壁の外側を囲むように城下町がある。』

そしてその城下町ごと高い防壁で囲ってしまおうという街の構造だ。検問所までは馬車が通っているが、外に出るとなると高い金を積んで雇わねば―誰も乗せてはくれないだろうな』

一応都市の近くには道が整備されているが、遠く離れた辺鄙な場所には道もなく、魔物が出る等の危険もある。

「なんだあ。フィールドじゃないんだ。つまんねー」

『は？』

町を出てすぐにクソ広い草原なんてのは有り得ないのか。

そうか：考えれば確かにな。

「ん、いやいや。なんでもない」

『話が噛み合っていないと思うのは私だけか』

「多分全国共通の見解かな」

で、いい加減ジードさんに話を合わせますと、

「…じゃあどうすんの。徒歩？」

『流石に徒歩では時間が掛かりすぎるな。』

「今の仲間は居ない。当面の足は馬か何かを使えば良いだろう」

……アタシ馬とか乗ったこと無いんだけど。
チャリはーいや、それ以前に存在しないか。

「馬乗れません」

『…元の世界の交通手段は一体何だったんだ』

「自転車っていう素晴らしい絡繰り。
体力次第で何処までも行けるよ」

本当、シンプルだが素晴らしい発明だ。
核兵器とかよりよっぽど使えるだろ。浸透率パネェし。

『…まさか魔法はー』

「ない。その代わり科学が発達してるよ」

科学のワードが分からないのか、アタシの中でジードが小さく唸った。

「…錬金術ってある？」

『迷信じみているがー有ることは有るな』

「その超進化系。

流石に石ころから金は作れないけど―炭素からダイヤモンドとか、
錆からルビーとか、その程度なら出来るよ」

アタシの記憶に劣化や変質が無ければね。

…さて、馬か…。

『…―駿馬一頭買うには金が必要が…出来るなら節約したいな』

そうだね。金を稼ぐ手段がない以上金銭は貴重だ。

『よし、私に良い案がある。…一度城に戻れ』

「…あんたって案外腹黒いね」

『頭が働くと言って欲しいな。利用できる物は最大限活用すべきだ。
—そう思わんか』

「かなり思う」

アタシは無事、白馬に跨って煉瓦の道を進んでいた。

乗馬ってそんなに難しくない。
もともとそんなに運動音痴じゃないんで、5キロ位進んだ今は大
分馴れ、歩くぐらいは楽勝になってきた。

『…能力は一番ではないのか…』

…まあ、致仕方あるまい。白馬という事で納得しよう』

「つつても2番だぜ？しょうがないじゃん。一番は陛下さんのなん
だから。

…てか、好きなの？白馬」

何その訳分からん嗜好。王子様に憧れる人ですか。

『…私に似合うだろうが。何処からどう見ても真っ白だ』

「ああそっちなか！！」

分かんねえ。コイツとことん分かんねえよ。

『見た目は大事だぞ。』

お前は黒ずくめの男に『こんにちは、天使です。貴女をお迎えに参

りました』…と、言われたらどうする。』

「迷わず警察に電話する」

だろうか？と、ジード。

『反対に、白装束の金髪碧眼の少年に同じ事を言われてみる。絶対に信じるぞ』

「うん、相棒の大型犬が欲しくなっちゃうかも知れない」

そして荷台に乗って昇天するんだろうな。

―すっかり城下町の防壁も遠ざかり、開けていた景色にも木々の姿が増えてきた。

「…で、さあ。今更だけどオレは一体何処に向かってんの」

『隣の都市はもう少し大きな街だ。

勇者だと言うことを口実―いや、主体に武闘大会でも開けば、強い輩―もとい、仲間が手に入るだろう』

「……つくづく汚ないな…お前」

頭は良いんだろうけどさあ…。真っ当に生きようとは思いませんか。

……いやいや、違うな。真っ当なんだよね。言い方が頂けないだけで。

「仲間とかめんどい。…ってか、人間関係を築くのがめんどい」
『お前も随分と人間失格だな』

本当に最悪なコンビかもね。
相性とかじゃなくて、根性のあたりが。具体的には揃って凄くねじくれてて。

「つまんねーなー。
戦ってみたいなー。モンスター出ないかなー」

ぱっからぱっから進んでるだけじゃ退屈なんだよね。
武器も手に入れたし、そろそろ異世界を堪能したい。

…いや、ケンカで堪能は虚しいとか言わないで。

『相手が面倒だから、魔物が出ないに越したことは無いだろう。
それにそう都合良く出る訳——』

メキメキメキメキ！！
バキン！！

「『は?』」

道沿いの木々が一挙に薙ぎ倒され、ずっと背後の道が塞がった。

―と、

「わあああああ！！ 退いて退いて退いて！！ 危ないですからあ
あ！！！！！！」

薙ぎ倒された場所から飛び出し、泣き笑いで全力疾走、かつ突進
してきた少年。

「……え、ちょっと何これ」

『…恐らく何かに追われているのだと思うが…』

と、全地面が激しく震撼した。

白馬が嘶き、前脚を高く上げて立ち上がる。

しっかりと捕まっていなかったアタシは、揺れる大地に振り落と
された。

「つくう！こ…ッの！！」

手綱は放さなかったので、逃げようとする所を地面に指を打ち込
んでしがみつき、阻止する。

…スゲー怪力だなアタシ。

「きゃああああ！！ 来ちゃったああーっ！！」

少年の悲鳴に顔を上げた。

「うえっ！？」

少年は、超デカイ巨人みたいなのに追われている。

メタボ体型で短足で、一つ目の巨人。肌の色がアバター。
これまたクソでかい棍棒を持っていて、ソレを振り下ろす度に――

「く……っううーッ！！」

大地が震える。

『サイクロプスだ』

――お前には強すぎる敵かも知れん』

「じゃあなに！？ 逃げろっての！？」

『馬がパニックに陥っている。人の脚では逃げ切れん』

「何が言いたいんだよ！！ 死ねってか！？」

『戦え！』

はああああ！？

馬鹿なんじゃないの！？

「勝てっこ無いんじゃないのかよ！！」

『ではただ^{なぐ}殺されたいか！』

「嫌だね！！ アタシはギリまで戦って死ぬ人間だ！！」

『―できるな』

…―ああクソッ！！

アタシは背中中の剣を抜き、手綱の輪の中に突き刺した。

「逃げてくださいその人―ッ！！！！」

「…誰が逃げるか！！」

突進してくる巨人に向けて、アタシは飛び出した。

―衝突する向きだからか、違うからか。

アタシ、凄く速い。

サイクロプスって怪人が、言語にならない声で吼えた。
そして振り降ろされた棍棒。地震の前に飛び上がり、それを足場に更に飛び上がる。

―凄い跳躍だ。巨人よりも高く跳ねてしまった。
アタシを捉える一つ目。

その極端に低い鼻に着地し、全力で振りがぶり、踏ん張って―

「―お前、記念すべきモンスター一号、―ッな！！」

眼球を殴った。

「ガアアアアアアアアアア！！！！！」

巨人の咆哮。そりゃあ痛そうに、目を庇って頭を振った。

「っうあっ！？」

アタシは振り落とされて、
上から追い討ちみたいに棍棒が降ってきてー。

ーやべ、無駄にでしゃばった罰か

もう少しでぶつかるーって所、で、
：茶色い何かのアタシをかつさらっていった。

直後、棍棒が地面を叩く。

「うえあっ！！」

「え、ちょー何事！？」

アタシを担いでいたのは、

「おまーっ、さっきの少年！？」

驚いた、この身体をかよ。

「ボクは逃げてって言ったのにいい！！」

「逃げ切れないって判断した結果だって！」

「貴方何者ですか！エンジェイ族じゃないですか！！」

「まー一応容れ物は！！」

『喋る暇があるなら前を見ろ!!』

このままだと馬が轢かれるぞ!!』

ジードの声が珍しく切羽詰まっていた。

「う、マジだ!!」

動物愛護法施行せよ!!

『―ち…、私が替われれば―』

「アタシもそう思うよ!!」

『嗚呼、―齒痒い!!』

「…わ―!!」

その時、確かに後ろに投げ出された感覚があった。

…けど、

―あれ?

「おい―離せ」

「わっちよっと!!」

『ちょ、コレどうなってんの!?!』

アタシの声が響いて聞こえる。

少年からアタシが逃れ、馬を繋いでいた対の剣を引き抜く。

…いや、其れよりも、身体感覚が薄い。ボケてる。
聴覚にも淡く残響が残り、景色は何処か遠くにある。

…え、嘘何これ。

「―覚悟しろ」

巨大な2本の剣が、太陽光を照り返して光った。

ジードの力

地に向いていた切っ先は、真っ直ぐに巨人へと。
ジードが、不敵に笑った。

「…一体何故かは解らんが―これは幸運と思うべきなのだろうな」

その声はつい先刻までのアタシと一緒に声だけど…―比較するのは残酷だ。

芯があって、涼しくて、重たくて、脊髄が共鳴で痺れるような凛々しい声。

「良かったなナギ。何故か私が替われたから、死なずに済むぞ」
『っせえ!!』

やっぱ無理コイツ。性格が完全破綻を期してやがる。
…友達になりたくないタイプ。

『どうしても良いから早く倒せつうの!』
「―ふん、私を侮って貰っては困るな。…何せエンジェイ族で一番の腕を持つ戦士―」

視界が真っ暗になる。：コイツ戦闘中に目ェ瞑りやがった。

「あー！！危ない！！」

これはあの少年の声。

「がふッ！！」

重たい衝撃があって、ジードはぶっ飛んだ。

アタシは衝撃だけ感じて、痛みの類は感じない。

『ちょ、お前馬鹿じゃないの！？』

いや絶対に馬鹿だ！！』

「く……！！油断を突くとは……油断していたな」

『いや、重複重複』

「む……」

……ああ、本物なのか。

「……そんな事はどうでも良い。

兎に角、異形の者は片付けさせて貰う」

両手に下げた二振りの巨刀。

鏢の無いその柄を、ガチャリと、結合した。

『…え、それくつつくの』

「ロングソードはこう使うのが主だからな」

—少年の声。

「ああっ！！ 気を付けて！！」

「言われずとも！！」

迫ってきた棍棒。煌めいた金属の刀身。

『—！』

それが、巨大な棍棒に簡単に切り込むのを、アタシは見た。

さくり、と音がしそうなほど簡単に、
棍棒が両断された。

『わ、—…』

アタシに感覚は通じないけど、その爽快感は視覚からの刺激だけでも十分だった。

大地を揺るがして、棍棒の上半分が落ちる。

ジードが飛び上がった。

呆けていた棍の持ち手を足掛かりに、更に跳躍。

アタシの所為で充血したサイクロプスの目。

脅えたような其れが、ジードを見上げていた。

「せめて、苦しまぬよう」

ジードが構えるロングソード。

槍投げのように片腕で。

「次には人として生まれるよう!!」

落下速度も加算して、その長い刀身が――

青い胸に、突き刺さった。

少年

巨人が空気を震わして叫び――いや吼えて、青い身体がぐらつく。

『倒れるけどー!?!?』

「分かっている」

ジードが剣を手放し、倒れる巨体を回避するように飛び退いた。

直後、仰向けにサイクロプスは沈む。

長い地響きが鎮まった頃には、アタシを含めた全員が、巨人が二度と起き上がらない事を覚っていた。

『倒、し――、っうあッ!?!?』

言い掛けた所で、身体が前に引っ張られる感覚。

と、同時に遠退いていた視覚情報が脳いっぱいになり、それらは思い出したように色味を帯びた。

「――あ、れ……?」

指の先から爪先まで、今は確かにアタシの意のまま。

…また、入れ替わった。

「すごい！！ スゴいじゃないですか！！
一人でサイクロプスを倒しちゃうなんて！！」

「え？ あ、……え？」

「最初から本気を出さなかったのは様子を窺っていたからですかっ
！？」

「いや、…えっと」

「尊敬ですうっ！ だって、だってボクは一人でなんか倒せなくて
ーっ！

…倒せ、なくて……」

とんでもなく物凄い勢いは急激に削がれ、途端に少年は下を向い
てしまった。

「…あれ。少年、それケモノミミ？」

渋い茶髪の頭からは、一對のシュンと垂れた耳が生えていた。
よく見れば背後には尾のような物がもっさり。
それもまた哀しげに低空飛行している。

「へ……？ あ……はい。」

だってボク、マニール族ですから」

ま……マニ…何だって？

『―マニール族。半獣で身体能力の優れた種族だ』

「え、なに。それって萌え的な何かなの？」

『……………はあ？』

「あ、ごめん何でもない」

いやだって萌の定番じゃんケモノミミ。

それにこの少年は小学生かせいぜい中一ぐらいにしか見えないし。
何ですか、シヨタにケモノミミ。意図的ですか、けしからん。

…けしからん！！

「あの一、独り言…？」

「―あ、…あゝ…そう、…そう。…あの一…持病の虚言症で」

「ええッ!？」

伏せられていた耳がピンツと立った。…面白。
ジードが口を挟む。

『いやその設定は止めておけ。…後々面倒だ』

「えー…。じゃあ何て」

『……。…言ってしまうえば良いんじゃないのか。素のまま』

「……お前、めんどくさくなつたろ」

『なった。別に構わんだろ、やましいことでもあるまい』

まあ…そもそもアタシの所為じゃないしな。もとはと言えば白ロ
ーブ達のミスが原因だし。

陛下さんとの打ち合わせとは違うが…

…まあ…—いっか。

「…—あのさあ、…ウォーレンって奴知ってる？」

「有名な方ですよ。このあいだ噂で聞きました」

本当に有名だな。

「オレ、その身体に憑依してる勇者です」

「……え、」

少年が、もとからでかい眼をさらに見開いた。そしてお決まり
の、

「えええええーっ!？」

…今気付いた。少年の瞳が三日月みたいに猫みたい。…いや…何も今言わんでも良かったか。

「じゃ、じじじゃじゃっ…!! じゃあ…っ!？」
あなたが勇者様っ!？」

キタよキタこの反応。

「一応」

ジードが戦っちゃったから、今んとこ勇者の使命は果たせてないが。

「あ…」

少年の動物じみた瞳に、ハイライト3乗分ぐらいの光が溢れた。

「あっこがれるなああゝっ。すっごいなああ、かっくいいなあああ
!」

さながら仮面ライダーに憧れる幼児のようななんちゃらかんちゃら。

にしても可愛いじゃねえか何だコイツ。何なんだこのピュアハート。

やんばい。すんごくツボった。

「―ボクっ！ 勇者様みたいな立派な戦士になりたいんです!!」

……え、

いやちよつと待て立派な戦士？

立派なゴリマッチョの中年に成長した少年を即座に想像したアタシは、早急に想像図を握り潰した。

「いやいや絶対止めといた方が良いよ!!」
「オススメしません! てかそんな残酷な事出来ません!!」

「えー……そんなぁ…。一体どうして？」

駄目だよこんな可愛い子が…。絶対駄目。

「それにアンタまだ子供でしょうが。戦いなんか危ないです、NG」

「……だって倒せないもん―1人でサイクロプスなんか……」

…え、…ちよつとおばさん話が分からないな…。何の話だ？

『「恐らく、成人の試練として設られた儀式の様な物なのだろう。それを持ち越えた時に大人として認められる。」

…実に良く有る話だ』

「ああ…なるほど」

アレでしょ。ドブ川飛び越えたら仲間みたいな。やんなかった？
…あれ、ちよつと違うか。

「じゃあ倒しちゃまずかったのかな。少年の相手だったあの巨人」
独り言の様に呟くと、少年が両手を振った。

「い…いえ！とんでもない！！ 助けていただかなかったら死んで
いるところでした」

まあ…確かにヤバげだったし。
…しかしアレ倒したの、アタシじゃないんだよな…。

少年が、遠慮気味に上目遣いで見上げてきた。可愛いぞ。

「…あの、それで勇者様。——なぜエンジェイ族の姿で……」

上手く行かなかったから『召還失敗』なのかな。これ。

「…うん…。事故ってゆーのか…詳しくはよく分かんが」

本当に良い迷惑だ。

「あんまり不便はしてないけどね」

『―勝手な事を言うな。私は非常に不便な状態を強いられているのに』

…そうか。ジードはそうだったな。

自分の身体なのに動かせないんだもんね。

「分かってるよ。」

オレだって自分の身体の方が勝手が良いよ」

『しかし…何故さっきは私が替われたのだろうか』

「…あれ？ジードにもわかんないの？」

『分からん。私が替われたらと歯痒く思った時に―前方に強く引かれる感覚を得て…。』

…気付いたら主導権を握っていた

ナギは、何か心境の変化などはなかったのか』

「……。……死にたくないと思ったよ」

実に真面目な口調とトーンは、ジードの声に凄く似合っていて、本当はこんな使い方をする声帯なんだと思った。

「オレも替わりたと思った。

オレが戦ったら勝てない。少年も助からない。

ジードがもし替われたら、きっと強いんだろうな……ってね」

成程、と、ジードの声が響く。

「……あ、あのう」

はっ、すっかり忘れてた少年の事。

「あっ、いや、ごめん。

……えっと、これまでもこれからもこんな風に一人で喋ってるかも知
んないけど……。

頭がおかしい訳じゃないから安心して」

「あ、い……いいえ。大丈夫です。

勇者様だもん、ボクには理解できない通信手段を持っているんです
よねっ！？　きっと！！！」

わお、それは便利な言い訳。

「まあそんな感じかな」

……さてさて、そろそろ移動を再開した方が良いのかも知れない。
野宿とかはあんまりしたくないから、なるべく早く到着したいし。

「……じゃ、そろそろ行くとするわ。元気でね少年」

「えっ…あつ、ちょっと待って下さいよう！　まだお礼も済んでいないのに…！」

「え、別に良いよそういうの。」

助けたのって成り行きだし。死にたくないから戦ったらキミを助けちゃっただけ」

「意図しないのに人助けを出来るなんて——さっすが勇者様っ！！」

え、何だよ何なんだこの展開は。

「此処は是非っ！！　ボクの村の方でおもてなしさせて下さい！
何にもない場所ですがお泊まりぐらいはできますから…！」

「いやいや大丈夫だよ。
そんな気イ使わなくてもいいからさ」

『いや、肖れる物には肖っておけ。
野宿しなくて済――少年の好意を無碍にするわけにはいかないだろ
う』

「アンタは相変わらず汚ねえな」

しかし少年の村か……
少年と同じ種族だろ？ ……あれ、もしかしてもしかしくなくても、
村人全員ケモノミミ？
わあああ。気になる。

「……じゃあ、……ちよろっとだけなら」

……好奇心という誘惑に負けた。

「ええ、ぜひぜひっ――！」

頭の中では、浦島さんのお歌が流れるのだった。

もふもふ(前書き)

短いです。

もふもふ

——これはもう、すんばらしい絶景ですな。

見てよこの見渡す限りのケモノミミ。

赤白黄色とは言わないまでも、毛色に合わせた耳はバリエーション豊か。

それと同じく、もっこもこの尻尾達。…やばいやばい。モフリた
い。

なんだか民族調で好戦的なファッション。レザーやファーが多い。
そして何故にそれが似合う。

……あ、そういえば少年も毛皮だ。

見渡す限りの萌え要素に、アタシは間抜け面で突っ立っていたの
かも知れない。

「——えと……あの、聞いてますか勇者様」

「はっ！ ええはい生きてます！ きちんと不純なこと考えずに生きてますよ！！」

『…考えてたのか』

考えてましたが。…いや何のことですか。

「一応、ここが例の僕の村です。あのっ、みんなに紹介しても良いですかっ!？」

なんだか段々と大事に…。

「……のぞましくはないが不可能ではない」

「じゃあっじゃあ！ おっけーって事ですネ!？」

うれしげに一目散に駆けていく少年は、……きっと無邪気と形容するべきなんだろう。良い方で。

「—みんな!—! 勇者様!—! 勇者様連れてきましたよ!—!」

走り去ってくモフ尻尾を、かわいーなー……なあって、眺めていた。

…あーあ、少年の反応からすると村中大騒ぎになっちゃうんだろ
うなー。

「ーん？ ……あれ？」

何だ何だ。静かだぞ。

——…それは、予想だになかった反応。
…返ってきたのは、冷たい視線と、冷淡な言葉。

「リッキー、お前」

——何やってる。

少年の眼が絶望に堕ちるのを見た。

そんで異世界

髪を染めて特攻服を着て、免許も持たずにバイクに乗って。

何が楽しい訳でもない。

だけど、俺は色んなモノに逆らいたかった。

法律にも、大人にも、社会にも、常識にも。

母さんに迷惑を掛けている事は分かっていた。

だけど、そんな事は関係無いと思っていた。

人を殴って、俺が勝つ。力の――喧嘩の強さが全て。

それは凄く都合が良く、凄く爽快な『法律』。

次々と与えられた喧嘩を引き受けていたら、オレは何時の間にかとても偉くなっていた。

家に帰る必要が分からなかった。帰る理由も無かった。

何時の間にか妹が大きくなっていて、オレの事を不思議そうに眺めていた。

――ある時、激化した抗争の中で、母さんは攻撃の対象にされた。

オレは仲間からの報告でそれを知って、迷った挙句に駆け付けた頃には、血塗れの母さんが倒れていた。

飲んだくれていたのか、家の近所のコンビニで襲われて、病院に運ばれたが、…駄目だった。

襲った奴らも死んでしまうとは思わなかったらしい。

オレは大して母さんと話してすらいなかった癖に……やっぱり、親なんだと思った。

母さんが死んで、オレはどうしたら良いか分からなくて、状況を理解できなくて、…兎に角、思い出したのは妹の事だった。

家に帰ると、他人を見るような目でオレを見上げていて、母さんの死を告げても、大した反応を示さなかった。多分理解していなかったのだと思う。

次の日、早急に葬式をした。金なんか無いので自治体の援助で、来た事も無いような制服を着て。

刺々しい赤を黒く染めて、疎らにしか入らない参列客を眺めていた。

その日。オレは敵対グループに殴り込みに行った。

―母さんを攻撃した奴ら。ケンカだけは最強だったから、頭もないような馬鹿を片付けるのなんか楽勝だった。

オレは決めていた。こんな馬鹿げたことは辞めてやると。

オレは自らの隊員を呼び出し、オレが隊を抜けることを告げた。

当然反対する奴らの相手をする気力なんか、とうに擦り切れてい

て、

オレは、気付いたら仲間全員を沈めていた。

地面に倒れる人間達を見て、後戻りできないとーそして、やってやろうじゃないか、と、踏ん切りが付いて。

オレは行った事の無い私立学校を辞め、バイトを始めた。

話した事の無い妹に孤独を謝ると、いつものことからーと、当然のように返されて、

……今更、同情と反省で、切ないという感情を知った。

…なんて事を、今更思い出した。どうしてだろう。

きっと、こんな気持ちの悪い浮遊感の中で、ずっと移動しているからだ。

俺は何処に向かっているのだろう。これは一体何だろうか。

と、突然光という『終わり』が見えて、俺は解放された。

「―でエっ!?!」

突然現れた床に叩き付けられる。

…何だよ、この扱い…。

「この方が―!!」

…その声を皮切りに、歓喜の色らしき歓声が上がる。
状況が読めないんだけど。

…あれ?ここ何処?

「…っとー、…俺、どうなっちゃったの?」

と、頭を掻いた所で、髪感触に違いを感じた。
…あれ、こんなに柔らかかったっけ? 俺の髪。

「魔王様!」

声のした方を向く。

―うおをッ!!!!?

「―「我々、貴方様の誕生を心待ちにしておりましたああ!!」」

かなりの人数が俺の前にひれ伏している。

うわぁ、懐かしいなこの連帯感。この尊敬。

……じゃ、なくて、

「…あのさ、魔王…って、まさかとは思うが俺の事？」

誰か鏡持ってない？

…何か、出来れば全身用のヤツ。

「勿論です。貴方様こそが我々の救世主。魔族の王、魔王様に御座います」

……………うわあ……………。

…せめて勇者がいいなあ、…なんて、違うよな。其処じゃないよと思うところは。

「…………俺ってば召喚されちゃった感じっすか」

「さすが魔王様、物分かりがお早い！」

…………肯定された。

わああ、これ現実ですか。

…しかしまあ…この魔法陣とか生贄とか、こんなモン在ったら嫌でもそう思うわ。

…………さーて、どうしたモンかな…。

「…で、勿論帰らせてはくれないんですよ。どうせ」

「誠に申し訳ありませんが…。我々魔族は大変危機的な状況でして」

「魔族と魔王だろ？　ちよっかい出さなければ勇者だって攻撃してこないよ」

一番偉いのだろう同じ年位の青年が、鮮血のように赤い目を見開く。

「そんなーとんでもない！」

勇者一行は何故か魔王誕生を目ざとく聞き付けてやってくるんです！！

人間の先鋭ばかりを集めて！！」

…いやいや、ちよっと待て。

「…魔王さえ召喚しなければ勇者も来ないじゃん。…それって」

「それはいいけません！　我々はヒトに変わってこの世界を支配せねば！！」

「…それさえ諦めれば永遠に安泰なのにな…」

まあ、気持ちは分かる。俺も中心的グループになりたかったし。

…ビッグになるって事は、政治とか治安とか色々大変になるんだぞ？ お前らわかってんのか？

「…で、さあ。勇者がどうせ勝つんだけど、負けた俺はどうなるの？ まさかお陀仏？」

「た、戦う前から決めつけないでください！ 勝ちます！…いや、ていうか勝って下さいよ！！」

「いやいや…もう決定事項だって…。ゲームはプロローグから魔王の惨敗が決まってるんだよ」

「よく解りませんが貴方の思う結果にはなりません！なにせ今回の魔王は貴方様なんですから！！」

と、根拠の分からぬ力説と共に、群集からまばゆい拍手が上がる。

…あと、えっと、ちょ、ちょいタンマ。

「…ちょ、ちょっと待って。何？今までの魔王ってそんなしょうもなかったの？」

眼前の奴は、群衆を落ち着けてから、畏まって俺の質問に答える。

「…いえ、異世界から魔王様を召喚したのは初めてでして。

我々が悉く連敗を記している理由は一体何なのか。真剣に考えた結果がコレに御座います。

我等は毎度の魔王となった者に敗因があると睨みました。大抵は権力目当てか、力づくでしたので。

その点、今回は完璧に御座います！！ 異世界からいらっしやった方なら権力も関係ありませんし、皆も待ち望み賛同した方ですから反対派も出来ないでしょう！」

おおー！！と、また盛大に拍手。

……ああ、何か随分期待されちゃってるって事かな。詰まるところは。

「…で、この身体は俺自身のモンなの？…何か違う気がするんだけど」

「そのお身体は此方で魔力を結集し、作製した身体です。只今は貴方様の物に違いありませんが、その身体が滅びようとも魂は異世界の本体に帰るだけで、貴方様に弊害はありません」

…うーん、なかなかやるなこいつら。

頭が回るといふべきか。

「…でもさあ…やっぱり悪は嫌だよ」

―散々聞いといて、結局の所それが俺の本音。

悪は嫌。

誰もが言うであろう、俺の価値観。

「そんなー！！」

「罪もない村を特攻したり、その村娘を浚って殺すように命令したり。…そういう、無関係者に牙を剥くような事は嫌いなんだ」

…直接的な関係のない母さんが死んだように。

あれ以降、勝ちに執着して手段を選ばないような事は―嫌悪するようになった。

そして、俺はそれを間違ひとは思わない。…だから、それは俺の中の『法律』なのかも知れない。

「…我々は、自分等を悪だとは思っていません」

―ひどく沈んだ青年の声。

…しかし―その迫力というか、確信に迫った色には、…若干たじろいだ。

「正義だとは世辞にも言えない。…それは分かっています。分かっていますし、言うつもりありません。

…しかし、では『悪』とは一体何でしょうか。

罪もない魔物を、鍛練と称して虐殺する勇者が『正義』ですか。

何かと迫害を受け、世界の暗い片隅に追いやられた魔族が逆転を狙う事が『悪』ですか。

…それは結局、多数決。多くの者に利益の出る事が『正義』として扱われる。…それだけでは無いでしょうか」

―それは…、

……それは

「…その点では、確かに我等は『悪』かも知れない。…それは皆、重々自負しております。

―が、それでも我々は自らの正義を信じて戦わねばなりません。…一般ではなく、世界ではなく、我々の『正義』を信じて、戦わねばなりません」

…そう、言われてしまえば。

農薬を散布し虐殺を繰り返す農家は、害虫にとっての『悪』。
野菜を食い荒らし利益を妨害する害虫は、農家にとっての『悪』。

敵はいつだって悪であり、悪だから敵になる。都合の悪いことは
個人の悪であり、それが集まれば、国家なり、人間なりの公式な『
悪』に変わる。

…逆に、こちらの正義はあちらの悪。そんな場合もあるだろう。
当然、貫いた正義は頑固な悪になるだろう。

…人間側の正義が勇者なら、魔族側の正義が魔王。

—言うなれば、魔王は魔族の勇者…かも知れない。

勇者と言うだけで持て囃される。…一方で魔王と言うだけで恐れ
おののかれる。

……確かに、それは好かん。

きっと一般の正義である勇者は、こんな事考えもしないだろう。

……それもまた腹立たしいな、この野郎。

—畜生

—やってやるよ。

「……はい……？」

「やってやるよ。魔王。」

久しぶりだ。この、血の沸く感覚。

――凄く、期待しているって言うのか。

「――魔族の正義って奴、貫いてやろうぜ」

また、青年が目を見開いた。

疎外

アタシが歓迎されていない空気は、肌で感じるほど濃厚だった。

どうして来たんだと、村人たちの目はそう言っている。

かわいいケモノミミも『効果はいまひとつのようだ…』…で、ある。

―いや、あたしが拒まれるのは別に全然構わない。なれてるし。

…やるせないのは、今、少年が責められてるって事。

事情が分からないアタシには内容がいまいち理解できない。
だから、なんで少年が怒られてるかなんて分からない。

…けど、どうやらひどいことを言われているようである。

少年は下を向いたまま、しばらく前からごめんなさいしか言わない。

「…ねえ、なんか…凄くまずかった感じ？」

『うむ…そのようだな』

ジードがいて良かったと思った。
だって、こーやって一人で会議できる。

「—どうしようか」

『…あちらの事情には、首は突っ込まない方が賢明だ。
どうにか話がつくまで、暫く様子を見よう』

「……そうか。…わかった」

——本当は、アタシは怒鳴って蹴散らしてやりたかった。
気に入らねえとぶん殴ってやりたかった。

張本人責められないからって、責任者を代用するなんて最低だ。

連帯責任とかって屁理屈は大っ嫌いだし。だから学校も嫌いだったし、部活も辞めてやった。

…けど、結局そうしても少年に居場所がなくなるだけ。

都合がいいのはアタシだけだ。ジードの言う通り、賢明な判断じゃない。

だからアタシはぐっと堪えて黙って、うつむく少年を見ていた。

暫くして、とぼとぼと少年が歩いてくる。

アタシは此方をジロジロ見てくる村人を睨み返し、少年に話し掛ける。

「――なんか…ごめん。悪かったかな」

「―いえ、…大丈夫ですよ！ ごめんなさい、村を挙げての歓迎は出来ないんですが…ボクの家に来てください！
大したお持て成しは出来ないですけど―」

これは空元気なんだろうか。
アタシには、無理に笑ったように見えた。

白色少女（前書き）

下ネタ注意ー！

白色少女

ゆらゆら揺れる尻尾について行くと、一件の小さなログハウスに辿り着く。

これが少年の家なのだろう。

村の建物は全部そうだ。レンガや木以外の家は見当たらない。

ログハウスつつーか、子豚の次男が作ったような家ばかり並んでる。

いやソレがまた絶妙に合うんだよ。ケモノミミに。

『――黙れ変態勇者。何をにやついているんだ、締まりのない。表情を引き締めろ』

「えっ!？ あんたとうとう読心術まで取得したの。
何だよ、うかうか考え事も出来ねえじゃん」

『…違う。……急に物凄い悪寒がしたんだ』

全身全霊で、ミミ萌えを拒否している声だった。

……ああ、なるほど。

受け付けないのね。体中の細胞という細胞が。

『…止めて貰えないか、頻繁に不謹慎な事を考えるのは。

……それは―確かに、時にはそういう気分になる時だってあるかも知れん。そこは理解しよう。お前とて人の子だ。

しかし…そういう事は周りに人のいない場所で、個人的に行って貰えないだろうか』

神妙な声でそんな事を言われて、

…―いやいや、ちょっと待て。待ってくれジードさん。

「いやいやちょっと待とう? ……あの、さ、アタシ別にエロいこと考えてる訳じゃ―」

『今お前の身体は女じゃないんだ。即座に下半身が反の―』

「黙れ!! 変態はお前だ!!」

言ってることは正論だがダメだソレは。

ちよっと色々大人の事情的に、そういう発言は描写を濁さなくちやいけないんだ。

「…ってめェ何なんだよ！新種のセクハラか！！」

『違うな。これは私の体だぞ。そんな姿を見られた暁にはそのブツを切り落とさねばならな—』

「恐ろしいこと言ってんじゃねえ！！！！」

こいつ、案外下ネタ好きなんじゃねえの？

いや、分かんないけどさ。

「ゆ、勇者様？　なんか…さっきから色々…—大丈夫ですか？」

…ほらー。不審がられちゃったじゃーん。

「あ…いやうん、問題ない。ちよっとこっちで色々と」

お下品なトークしてました。

「…な、なら良いですけど…。そうですよね、勇者様ですもんね」

「ん、まあ、間違っちゃいないかな。…いや、それは別に良いんだよ。」

——所で、ここがキミの家？」

「はっ！」

少年の耳が、ピンツと跳ねた。激萌え。

「そうでしたそうでした！ はい、ボクの家です」

話の進展しそうな気配だ。よしよし。

「……ただいま」

分厚い木製のドアは少年には重たいようで、全身を使って押し開けた。

「お邪魔します」

家の中は桧の匂いがした。

ガラスの窓が無いからか、薄暗い。

物珍しいんであちこち見回している。と、

『きよろきよろするな。子供かお前は』

「あーんもう、いちいちうつせえよ。だって新鮮じゃなかよー」

『ナギ、お前は一応でも勇者なのだ。もう少し誇りを持って
というか恥を知れ』

「まるでオレに羞恥心がないみたいじゃないか」
『違うのか？』

「……否定はしないが」

頭の中で、小さく溜息が響いた。

「…あ！これ何て言うんだっけ。なんか思い出せそうな気がする」

壁に掛かっている、小さな布をいっぱい繋いだような壁掛け。

『伝統工芸か何かじゃないのか？』

「うん、多分そんなだったと思う」

何だっけなく何かやったんだよなー、こないだ家庭科で。

「あのさー少年、これってー」

壁の飾り物について話題を振ろうと思って、少年のほうを向くと、

「なん、だっ…た…」

既に少年は全然違う場所において、

その後ろ姿は、とてもポップだなんて言える空気じゃなくて、

どうしても良い雑談は簡単に忘れた。

「——お姉ちゃん」

少年が薄く開いた扉から、光が漏れ出している。

アタシも気になって、少年の元へと歩み寄った。

「……ああ…リッキー」

弱々しい、女の子の声。泣いているのか、語尾が震えている。

アタシは薄く開いたドアを覗き込んで、

「お姉ちゃん…ボク——今日も大人になれなかった」

「……そう…。」

…うん、いいの…。リッキー、どうか無理はしないで…。
…っ…ああ、何で……ごめんなさい、私——」

「……泣かないで、お姉ちゃん。…ごめんね、ボクが弱いから…」

そこにいた少女に、驚いた。

—この村で初めて見た、白い織物のワンピース。

肌も髪も白い。純白だ。瞳が赤い。

泣いて充血した所為もあってか、それはさらに強調されて見えた。

「アルビノー？」

その赤い瞳が、

驚きを含んでアタシを捉えた。

その訳（前書き）

展開が早いです

その訳

少年の民族は狩猟民族。

狩りをして生活をする、勇敢な民族だったらしい。

大人になる為の儀式もその影響で、ひとりでモンスターを倒せれば一人前だと認められる。

しかし、ジード曰くサイクロプスは中級のモンスターで、わざわざそんな物に手を付けなくても良いはずだ。…そうだ。

「どうしてわざわざあんなヤバいのに挑んだりしたの？」

少年が苦笑い。

「……ボクは、本当はまだ大人になる必要なんか無いんです。

けど、今はどうしても必要で…。

形式化してしまった仕来たりを利用して、ボクは大人にも敵うって知らせたかったんです」

成人式でビール呑みすぎてベロベロになる…みたいな？

…いや、全然違うか。

「…何でキミの力を知らしめたかったのさ？ 死ぬかも知んないのに」

「……死んだって良いんです、…お姉ちゃんを救えないボクなんて」

その、お姉ちゃんが弱々しく言う。

「リッキー、やめて頂戴……そんなことを言うのは」

少年は、机を叩いて立ち上がった。

髪やミミの毛が逆立っている。尻尾も膨れていた。

近所で喧嘩をしていた猫を思い出した。

「だって！！ そんなボクが生きていたって辛いだけじゃないか！後悔して惨めに生きるぐらいなら行動して死んだ方がマシだ！！」

こんなショタ…いや、子供が、死んだって良いなんて事を言うなんて思わなかった。

戦時中の国民はこんな感じだったのかな。

「…少年、キミはもう十分大人だよ。立派に一人前だと思うけど」

少年は息を荒らげながらも、少し冷静になって座った。

「―ごめんなさい、ちょっと興奮しました。

この一族は、今は勇敢なんかじゃありません。…ただの腰抜けに成り下がってしまった」

お姉ちゃんは、黙って下を向いたままだ。

「…どういこと?」

アタシが訊くと、少年はちらりとお姉さんを見た。
様子を窺いながら、躊躇いがちに呟く。

「…森の深くに、儀式の塔があります。

昔…―いえ、ほんの最近までは、あそこは追悼や婚礼のための神聖な塔だった」

俯いていたお姉さんの目から、堰を切ったように涙が溢れた。

慰めたいんだけど、これあんまベタベタ触ったらセクハラにならないかな。今一応男だしな。

…なんで、一線を越さない程度に肩を抱いておく。…あれ、これ

ってまずいかな。どうだろう。

「…けど、今は只の魔物の巣窟です！
その上、頂上にいたセイレーン様まで…今は…」

セイレーン？

なんか…神格じみた名前ですな。

「それがどうしたの？」

少年は僅かに頷く。

「セイレーン様は、ボクらの守り神でした。なのに気が触れてしまったのか…ボクには分かりませんが…」

…生け贄を渡さないと村を滅ぼすと言われました。…それで、お姉ちゃんが…」

「！！」

—だから、お姉ちゃんはこんなに憔悴してるのか。

『—ナギ、分かっているのか。お前の使命はボランティアじゃない』

ジードの声。

今は聞きたくない。

「…いや、ボランティアだ。オレに利益はないんだから」

この世界を救っても、アタシの世界は平和にならない。
戦争はなくならない。地雷は消えない。ホームレスに家は見つからない。

…停学処分は、取り消しにならない。

—だから、やりたいことをやる。

「少年、大人じゃないとお姉ちゃんを助けられないのかよ」

「…いえ…塔に行くことを、未成年を口実に断られただけです」

「そうか。—じゃあ問題ない」

決めたら即行動。

アタシの短所で、長所でもある。

立ち上がって、見上げる少年に言った。

「そのセイレーンって奴、ぶん殴りに行こうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9112n/>

…手ちがい。

2011年10月7日00時10分発行